

『書き出しは誘惑する～小説の楽しみ』

中村 邦生／著 岩波書店 (2014年)

小説の書き出しの表現に心惹かれて1冊読んでしまったという経験はありますか？この本では名作、問題作、異色作などあらゆるジャンルの小説を例にあげ、書き出しがいかにか作品全体を魅力的に相関しあっているかを解説しています。多くの書き出しから誘惑される本や、巻末の作品リストから読んでみたい本を選ぶのも、いいかもしれません。この本が、小説を読む楽しさに出会う読書ガイダンスになることを願っています。



『日本語のニュアンス練習帳』

中村 明／著 岩波書店 (2014年)

ピザとピッツァ、あなたはどちらの言葉を使いますか？同じものを指しているのに、どこかニュアンスが違いますね。ニュアンスとは、表現の微妙な違いのことです。日本語は、このように、同じものを表現するにもニュアンスが違う言葉がたくさん出てきます。この本では、どのように言葉を使いわけるといいのか、どう使えば正確に伝えることができるのか、Q&A形式でたくさんの例題がのっています。日本語の表現の幅がぐんと広がりますよ。



『10代のための古典名句名言』

佐藤 文隆・高橋 義人／著 岩波書店 (2013年)

「みんなちがって、みんないい」これは、金子みすゞの「私と小鳥と鈴と」という詩の一節です。この本で最初に紹介されている言葉で、外の世界に恐れや不安を抱いてしまう人に、「みんなと同じでなくていいんだよ」とやさしく語りかけています。

著者は語り継がれてきた名句名言に接することで、多様な考え方に気づくきっかけとして欲しいと述べています。この本に掲載されているたくさんの言葉の中に、ハと気づかされるものがあるかもしれません。

『平安文学でわかる恋の法則』

高木 和子／著 筑摩書房 (2011年)

この本は学生時代、古文が苦手だった著者が平安文学の魅力やおもしろさを語る本です。平安時代の貴族の恋のはじまり方から結婚、別れ方まで解説します。現代のわたしたちでは考えられないような恋の作法や結婚生活、恋をしたときのための和歌の作り方まで教えます。古典文学では一種の法則があり、その法則を知ると初めて読むお話でも「あ、あの作品と同じパターンだな」といったように流れをつかむことができます。

この本を読むと古文の授業がほんの少し楽しくなるかもしれません。

『知の古典は誘惑する』

小島 毅／著 岩波書店 (2018年)

古典は現実の日常とはほど遠いと敬遠されることが多いと思います。しかし、人類は精神を養い、魂を憩わせるために古典を読みついできました。「すぐに役立つ」とは言えませんが、精神的成長過程をすごしている中高生のみなさんには、古典から時間と空間を超えて心に響くものを得ることができると思います。肩肘をはらずに、古典に親んでもらえるきっかけとなればうれしく思います。本書を通じて、広い世界に目を向けてください。



『小説は君のためにある～よくわかる文学案内』

藤谷 治／著 筑摩書房 (2018年)

大人は子どもに本を読めと言います。本は人生と一緒に考える友だちになると言う人もいます。それは本当でしょうか。この本は、どうして本が友だちになるのか、小説が人生の役に立つのかということを読み明かしながら、豊かな読書の世界へと誘います。小説は人生にとってどんな役割を果たすのか。またどんな可能性を秘めているのかということをお教えしてくれる一冊です。

